

講演：「川が流れる地域の幸福～素敵な川、残念な水辺～」

ネイチャージャーナリスト かくま つとむ(鹿熊 勤)

30年ほど、取材活動、原稿を書いて生活をしています。20代ごろ釣り雑誌の記者をしていました。30歳前ごろにフリーになり、アウトドア雑誌や農業雑誌で地方と呼ばれるところを中心に取材活動をして、原稿を書いています。

戦前の雑誌「新青年」の編集長をつとめた森下雨村(佐川町出身)の「猿猴川に死す」という本にたいへん刺激を受け、仁淀川に憧れました。90年代に初めて仁淀川に足を踏み入れ、ある時偶然、川漁師の宮崎弥太郎さんと出会い、小学館のアウトドア雑誌「BE-PAL」で聞き書きを連載しました。この連載は2年間続き、「仁淀川漁師秘伝」という本になりました。

そうした経験から、仁淀川はどのような位置付けができるのか、川で遊ぶことがどんな意義があるのかということを中心に話をさせていただきます。



私は、北は北海道稚内、南は沖縄県西表島まで色々な川で遊んできました。良い川には地域を越えた共通項があります。

良い川が流れる地域の傾向

- ・川に潜ったり魚を捕って遊んでいる子が(まだ)いる
- ・大都会の釣り具店にはない素朴な道具が売られている
- ・ここの魚を食べても大丈夫か…と不安にならない水質
- ・アユ、ウナギだけでなく、雑魚も食べる文化がある
- ・生き物の種類と数が多い など

しかし、現代の川が抱えている課題はたくさんあります。大きく分けると、降雨量の極端な変動や生物の移動を妨げる【水文学的要因】、生物に有害な物質の流入や外来種の問題といった【生態的要因】、伝統的な漁業や食べる文化、民俗文化が消失している【社会・文化的要因】の3つ。歴史が忘れられているなかで、「川ガキ」というのも同時に減ってしまっていると言われていいます。

川の健全度をチェックする要素が、自然のボリューム、その自然を生かすために地域が何か協力しているかという地域の連携力、歴史的・民俗的なものが受け継がれているかという3点で、これらの要素の中心にあるのが魚と関わる暮らしです。魚に関心がないということは、川、地域を大事にしていけないということではないかと思えます。

人々が川に愛着をなくすと見切りをつけて諦め出し、水を汚し、川が悪くなるのを容認するという負のスパイラルに陥ってしまいます。これを変えるキーワードが「川ガキ」ではないかと思っています。

ですが、現在「川ガキ」は絶滅危惧種となっています。

川ガキが絶滅寸前となっている理由と背景

- ・可処分時間の減少(塾、習い事、宿題など)
- ・誘惑の増大(ゲームとネットとスマートフォンなど)
- ・伝承機会の喪失(両親・祖母世代が川遊びを知らない)
- ・大人の責任回避(事故を恐れて子どもを川へ近付けない)
- ・自然の量的・質的劣化(わくわくするほど生き物がいない)
- ・出生数の減少(子どもの数が少ない)

「川ガキ」を残すことで負のスパイラルから好循環へ移っていく可能性がありますし、子どもの成長にも自然体験が不可欠です。

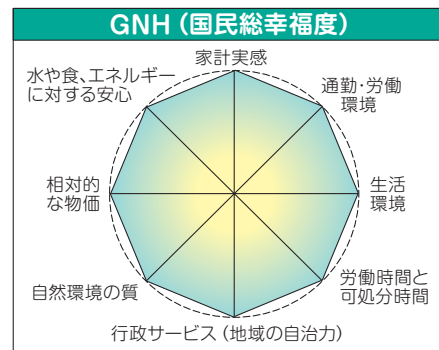
子どもに自然体験が必要な理由

- ・川遊びは「動物としての人間」の危機回避能力を養う
- ・科学的探究心を育むよき一歩になる
- ・生き物遊びはバーチャルでなくつねにリアル
- ・川で遊ぶと、環境の大切さが理屈抜きでわかる
- ・川遊び体験は、その質が高いほど郷土愛を強くする
- ・生命摂理の原則がわかると、心の知能指数(EQ)が上がる
- ・人間の運動能力は自然の野生生物にはかなわないので、知恵を働かせることの意味を悟られる

良い川が流れる地域の傾向について先述しました。GNH(国民総幸福度)という言葉が近年言われています。

幸せの計り方はトータルです。こういう指標で仁淀川流域の暮らしを当てはめると、そう悪くないのではないのでしょうか。

GNHに対比する言葉で、「クオリティ・オブ・ライフ」という言葉があります。これはどれだけ人間らしいか、自分らしいかということで、こういう視点で見たら高知で普段から食べているものはよそから見たら羨ましい。全国を歩いた私なりの比較で、高知県全般の優位性は



高知県全般の優位性

- ・すばらしい川が今もたくさんある!
- ・固有の文化が際立って多い
- ・自然、第一次産業型の未利用資源がそこら中にある
- ・環境意識が高い(ほうだと思ふ)
- ・すでにGNHを未来の指標にしつつある
- ・楽天的(な人が多い)
- ・高知県民は、郷土愛が強い
- ・議論好きである(でも、酒を飲みながらなので内容をよく忘れる)

ということが他県に比べて良いポイントだと思います。最後に、「川ガキ」は地域の幸福度を測る永遠の指標であると思っています。

「川ガキ」をカワウソの二の舞にしないよう、「川ガキ」が残っている県として知恵を結集してほしいと思います。

「えいでねえ♪仁淀川」第3回仁淀川シンポジウムレポート



「えいでねえ♪仁淀川」第3回仁淀川シンポジウム次第

●日時・会場
●日時:平成26年2月1日(土) 午後1時から午後4時 ●会場:高知市春野文化ホールピアステージ

●主催団体等
●主催:仁淀川清流保全推進協議会、高知県 ●共催:仁淀川流域交流会議、高知市

●テーマ 「えいでねえ♪仁淀川」
水質日本一の仁淀川。きれいだけれど昔に比べて遊ぶ子どもが減ってきていることから、今回は「川で遊ぶ子ども=川ガキ」というテーマを設定し、子どもたちが川に親しめる機会を増やしました。実際に川で遊んで、学んだ川ガキたちの見つけた「えいでねえ」にふれる内容となっています。

●プログラム
① 開会あいさつ

② 活動報告

「高知県の美しい清流を守る
高知食糧株式会社の活動について」

高知食糧株式会社 取締役営業本部長 山崎 大輔

③ ポスターセッション

●「日下川で遊んだよ!」

日高村佐川町学校組合立加茂小学校3年生

●「川ガキのススメ…みんな川ガキにならんかえ…」

田部 未空・祥一郎

●「仁淀ブルーのひみつ」

土佐市立高岡中学校・科学実験部

④ 演題:「川が流れる地域の幸福
～素敵な川、残念な水辺～」

講演 ネイチャージャーナリスト かくまつとむ(鹿熊 勤)

⑤ 閉会あいさつ

はじめに

仁淀川清流保全推進協議会が主催する「第3回仁淀川シンポジウム」が平成26年2月1日（土）に開催されました。協議会では、仁淀川流域の水質・環境・人とのつながりを流域全体で考えるために毎年シンポジウムを開催しています。今回は川遊びをする子どもの減少を食い止め、川へ呼び戻すために「川ガキ」というテーマを設定しました。

シンポジウムに先立ち、平成25年7月に仁淀川河口といの町波川で「生きもの探しと観察会」を高知県立高知青少年の家が主催、当協議会の共催で実施しました。ポスターセッションではこのイベントに参加した子どもを始め、学校と地域で取り組んだ川遊びを楽しんだ子ども、仁淀川の水質や生きものを調べている中学生たちに発表してもらいました。

講演にはネイチャージャーナリストの「かくまつとむ」さんを講師に迎え、「川が流れる地域の幸福 ～素敵な川、残念な水辺～」と題して全国の川や水辺を見てきたかくまさんならではの話をいただきました。

参加いただいた方からは、「子どもたちの発表は元気があって良い」「仁淀川と全国の川との比較や、GNH（国民総幸福度）、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）といった広い視野での話で分かりやすかった」など評価していただきました。

シンポジウムに参加いただけなかった方にも内容をお伝えするべく、概要をまとめた報告書を作成しました。皆様の今後の活動の一助となりましたら幸いです。

平成26年3月吉日

仁淀川清流保全推進協議会
会長 石川 妙子

仁淀川清流保全推進協議会が目指すもの

平成22年3月に高知県が策定した「第2次仁淀川清流保全計画」を流域住民や団体、事業者、行政等が連携し、共通認識のもとで推進していくため同年6月に設立されました。

協議会ではこれまで仁淀川シンポジウムや河川一斉清掃に取り組んできましたが、仁淀川を本当の清流にしていくためにはまだまだ課題はあります。流域の皆さんとともに考え、動いていきたいと考えています。

ロビー展



活動報告

○「高知県の美しい清流を守る高知食糧株式会社の活動について」

高知食糧株式会社 取締役営業本部長 山崎 大輔

高知食糧株式会社 山崎取締役営業本部長より、高知食糧株式会社が販売する無洗米「まんま炊つきー」の紹介と、同社が取り組んでいる清流保全活動への取り組みについて報告がありました。

無洗米はとがずに炊くことができ、とぎ汁で川や海を汚さず、かつ節水効果もある、環境に優しい商品であるという紹介ののち、無洗米の売り上げの一部、1キログラムあたり1円を県内の清流保全活動へ寄付しており、助成団体が活動する際にはともに参加するなど、積極的に清流保全活動に取り組んでいることを報告し、最後は今後も高知の美しい川を守っていきたくと締めくくりました。

高知の美しい川を未来へ



高知県×高知食糧
高知県清流保全
パートナーズ協定

ポスターセッション

○「日下川で遊んだよ！」

日高村佐川町学校組合立 加茂小学校3年生

加茂小学校3年生は、平成25年6月22日に親子行事で取り組んだ日下川での水生生物調査、川遊びの感想を学年全員で発表しました。

「魚を捕まえたり、生き物を見つけることが楽しかった」、「釣りやボートで遊んだことが楽しかった」など当日の楽しかったことや印象に残っている出来事、地域の方の協力で楽しく実施できたことなどを映像とともに元気に発表してくれました。



○「川ガキのススメ…みんな川ガキにならんかえ…」

田部 未空・祥一郎

平成25年7月20日、27日に高知県立高知青少年の家の主催（共催：仁淀川清流保全推進協議会）で実施した「親子河口観察教室」「親子ガサガサ体験教室」ともに参加した、田部未空さん、祥一郎さん姉弟が川ガキの未来について発表しました。

姉弟は実際の川遊びの体験談を交え、川で遊ぶ、学ぶことの楽しさや、「川ガキが増えると将来、環境や自然について考え、守っていける心豊かな大人になり、平和な世界がやってくる」と発表しました。

そして「大人も子ども達と一緒になるともっと川で遊び、体験してほしい」と、川ガキの魅力をススメ、伝えました。

○「仁淀ブルーのひみつ」

土佐市立高岡中学校 科学実験部

土佐市立高岡中学校科学実験部は、仁淀川は水質日本一に認定されたが、下流域でも本当にきれいなのか、また、波介川河口導流路が完成したことによる河川への影響を調べるため、平成24年度から土佐市用石地区の仁淀川と波介川で①水質、②水生生物、③植生について調査しています。

仁淀川について各調査の結果は、

- ①水質はCOD、NO₂、NH₄の測定の結果、季節によって多少の汚染は見られるものの、比較的きれいだ。
- ②アユカケ、ミズズハゼといった清流の証である生物が見られた。
- ③種数は1年通して変化がなかった。

となりました。

今後も仁淀川の秘密を探り、きれいに保てるように研究を続けたいと発表しました。

